

ΚΟΙΝΩΝΙΑ

コイノーニア

知っておきたいキリスト教のことば (7)

与る あずかる

「聖餐にあずかる」という言葉を聞かれたことはあるでしょうか。「今日は陪餐にあずかることができました」という会話をするかもしれません。また聖書をもても、「永遠の命にあずかる」、「復活にあずかる」、「キリストの血にあずかる」などという書き方があります。

新共同訳聖書を見てみますと、「あずかる」という訳語を使っている語のもとの原語であるギリシア語は、いろいろなものがあります。

例えば、「メテコー」という語は I コリント 9:10 に出てきますが、ここでは「分け前にあずかる」という意味を持ちます。また、「エイス」という前置詞を「あずかる」というように訳している場合もあるようです。マタイ 25:46 にある、「永遠の命にあずかる」と訳されている部分は、永遠の命の中に外から加わっていくようなイメージをもつ言葉なのです。

その中で、今回は特に「コイノーニア」が「あずかる」と訳されているところに注目したいと思います。新共同訳聖書の中で「コイノーニア」を「あずかる」と訳している箇所は、I コリント 10:16 に二箇所、そしてフィリピ 1:5 と 3:10 の合計四箇所しかありません。この言葉は所属を示す抽象概念であり、「交わり」や「一致」と訳すことが多い語です。

したがって、「キリストの体にあずかる」(I コリント 10:16)とは、パンという分け前を受けるといっただけでなく、キリストの体につながる事、そしてさらに共にキリストの体にあずかる人たちとの交わりをも意味するのです。

この「交わり」こそが、聖餐式です。「聖餐にあずかる」とは、共にキリストとの関係の中に入ることなのです。

次回は「新しい契約」です。お楽しみに。



「最後の晩餐」

ドウッチョ・ディ・ブオニンセーニャ
(1255-1319 頃)

わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。

(コリントの信徒への手紙一 10 章 16 節)

